

# まえばし 地下 マップ 下川淵地区

前橋市教育委員会事務局 文化財保護課  
Tel.027-280-6511 令和5年3月発行

## とくまるなかだ じょうもんそうそう 徳丸仲田遺跡の縄文草創期の土器

【12000年前】

北関東自動車道の建設に伴う発掘調査で、徳丸町内の藤川西岸の微高地から、東日本最古級の土器である縄文時代草創期の隆起線土器が見つかりました。丸底の深鉢で内面に薄い膜が附着するなど、煮炊きに使われていたと思われます。同時に尖頭器や磨石、敲石などの多数の石器も出土しました。これらは、住居跡のような「窪み」から出土していますが、柱や炉跡などは見つかっておらず、移動中心の暮らしの中で、季節ごとに短期間滞在するような拠点であったと考えられています。



隆起線土器

口径 26 cm 強、高さ 29 cm 前後。口唇部のジグザグ波状文は全周し、その下の隆起線文は 4 条でらせん状にめぐっている。



土器が出た窪み

平面形は南北に長い不整形円形で、大きさは 3.8 × 3.1 m。土器片の分布は窪みの北東に極端に偏って集中していた。

(群馬県提供)

## しもかわふち 下川淵の古墳【4~6世紀】

昭和10年、県下で一斉に行われた古墳分布調査では、横手町の浅間神社古墳など3基の古墳が確認されました。その後、平成元~7(1991~1997)年度にわたる県道前橋長瀬線改良事業に伴う発掘調査により、さらに4基の古墳(周溝墓)が確認されました。

く 田東遺跡からは前方後方形周溝墓(4世紀前半)が良好な状態で確認され、祭祀に使用された土器群とともに鶏形土製品が出土しました。鶏形土製品は胴部に孔が開いており、竿をさして墳丘に立てたと考えられています。鶏は時間と空間をまたぐ能力を持つ霊鳥としての意味をもち、そこが墓であり境界であることを表しています。この周溝墓は、ヤマト王権と政治的結びつきを強め、八幡山古墳や前橋天神山古墳を築いた毛野国の首長のもので、広大な水田開発を担ったムラ長の墓と考えられます。

下川淵村3号墳は、前方後円墳と推定されますが、現在は直径13m程の後円部が残るのみです。採集された埴輪破片の特徴から6世紀後半の築造と推定されています。6世紀初頭の榛名山二ツ岳火山災害後の復興・再開発を担った有力者層の墓であるかもしれません。



公田東遺跡の前方後方形周溝墓



上記周溝墓に供えた鶏形土製品  
(上記2点群馬県提供)



下川淵村3号墳(熊野神社境内)

## しもかわおおみぞ 「下川大溝」【4世紀】

徳丸仲田遺跡からは古墳時代の水田跡とこれに伴う灌漑用の大水路(4世紀後半)が確認されました。強く締まった地面を上幅3.0~5.0m、深さ1.0~1.2m、確認された長さだけでも90m程度掘り抜いており、鉄製の刃先をつけた鋤・鍬等を使用したとしても相当な労働力が必要であったと考えられます。また、南東2kmに位置する利根川東岸の砂町遺跡(玉村町)においても、同時期に開削されたほぼ同じ規模の溝(上幅3.5~7.0m、深さ1.1m)が確認されています。同一地形に沿った走行と延長方向から、同一の水路跡の可能性があり、組織的に計画性を持って水田開発が進められたのではないかと考えられます。なお、同じころ前橋台地東部には八幡山古墳や前橋天神山古墳が築かれており、水田開発を経済基盤とした毛野国の首長の強大な力を感じさせます。



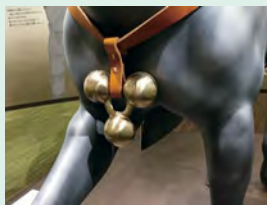
広域幹線用水路

(群馬県提供)

## 古墳時代の鈴の音【6世紀】



三環鈴の破片



三環鈴の装着例

「体感!しだみ古墳群ミュージアム」/ 画像は「かみつけの里博物館」提供

朝倉工業団地遺跡群からは、7世紀後半の竪穴建物のカマド付近から三環鈴の鈴部の破片が出土しました。三環鈴は通常、5世紀中頃~6世紀前半の古墳の副葬品として馬具とともに出土します。鈴の中に石を磨いて滑らかにした石丸を入れ、音を鳴らしました。本地域北東に位置する広瀬古墳群と関わりがあるのかもしれません。

約2万4千年前	浅間山が山体崩壊し、前橋泥流が発生する。
約1万6千年前	前橋台地が安定化したと想定される。
3世紀後半	浅間山が噴火する。(浅間C軽石が降下)
4世紀	東日本最大の前方後方墳の八幡山古墳や前方後円墳の前橋天神山古墳が相次いで造られる。
6世紀	榛名山二ツ岳が2度噴火する。
大化元年(645)	大化の改新が始まる。各国に国司・郡司が置かれる。
大宝元年(701)	大宝律令が制定され、国・郡・里制が施行される。
和銅3年(710)	平城京遷都。
和銅6年(713)	上毛野国を上野国と改める。この頃、国府が成立する。
養老4年(720)	舎人親王(とねりしんのう)ら「日本書紀」をつくる。
養老7年(723)	三世一身法を定め、灌漑施設を新造し開墾した者は、子孫・曾孫の三代(三世)までの所有を認める。
天平15年(723)	墾田永年私財法を定め、墾田の永久私有を許可。ただし、位階により墾田所有面積を制限。
延暦13年(794)	平安京遷都。
弘仁9年(818)	弘仁の大地震。
天慶2年(939)	平将門の乱。上野国府を占領。新皇と称し、東国諸国の国司を任命する。
天仁元年(1108)	浅間山が噴火する。(浅間B軽石が降下)
12世紀前半	女堀が開削される。
文治元年(1185)	源頼朝が守護・地頭の設置を認められる。
元弘3年(1333)	新田義貞、生品神社に挙兵し、鎌倉を攻略。
元弘3年(1333)	伊達孫三郎入道道西が先祖伝来の上野国公田郷一分地頭職の安堵を求める。
暦応元年(1338)	足利尊氏が征夷大將軍になる。
享徳3年(1454)	足利成氏、関東管領上杉憲忠(のりただ)を謀殺し、享徳の乱が始まる。
応仁元年(1467)	京都で応仁の乱が起こる。
文明8年(1476)	長尾景春、上杉氏に背き、武蔵五十子陣(いかつこのじん)を攻める。



## くでんごう だて 公田郷と伊達氏【14世紀】

伊達家に伝わる南北朝時代の古文書に「公田郷」（現在の公田町）が見られます。元弘3（1333）年10月に伊達孫三郎入道道西（どうさい、実名は貞綱）という人物が後醍醐天皇方に属して戦ったので、先祖伝来の上野国公田郷一分地頭職（「一分」は郷全体ではなくそのある部分という意味）の安堵を求めました。12月には上野国司である新田義貞が天皇の命令に基づき承認の文書を出しています。道西は、但馬国小佐郷（兵庫県養父市）を本領とする但馬伊達氏の惣領で、伊達氏由来の地である陸奥国伊達郡（福島県伊達市）や公田郷にも所領を持っていました。地名学では、平安時代に私有農園である荘園が増大する中、国衙に税を納める土地が珍しく、「公田」という地名として残ったと言われています。

## かんごう 前橋台地の中・近世の環濠屋敷

【15~19世紀頃】

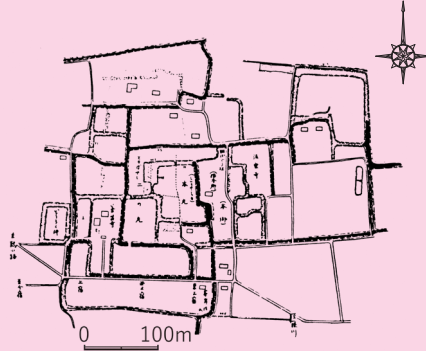
本地域には、かつて屋敷の周囲に堀を巡らせた環濠屋敷が散在し、現在でも堀が残り環濠であることが確認できる場所があります。横手湯田遺跡Ⅰ区（鶴光路町）の屋敷跡は、二重に堀が巡り、その内部から建物の建替えの痕跡である土坑・柱穴群が多数確認され、中世末から近世末まで継続的に営まれていたことがわかりました。また近隣の調査から、屋敷の堀と連結する溝も多く確認されており、環濠屋敷どうしは堀や溝でつながっていたと推定されています。前橋台地では中世ごろ、利根川の河床が低くなり用水確保が困難となったため、これらの環濠は①灌漑用水②日常用水③堀底の泥を肥料とした④淡水魚を養殖し栄養源としたなど、多目的に使用されたものと考えられています。



横手湯田遺跡の屋敷跡  
（群馬県提供）

## りきまる 環濠屋敷が連結した力丸城【16世紀】

力丸城について、江戸時代の『上野故城屋敷記』『上野国志』には、那波氏の一族、日向守広宗が初めて住み、天正18(1590)年にその子孫が没落したことが記されていることから、大江姓那波氏の一族、力丸氏の居城であったと思われる。山崎一氏は、複数の環濠屋敷が近接して存在しているなかで、防備を強化するために連結され、方眼状に郭を配置した力丸城が生まれたと推測しています。

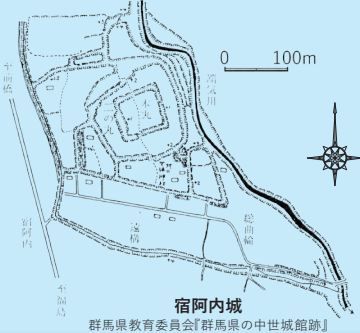


力丸城  
群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』

## きょうとく なが お かげ は る 享徳の乱・長尾景春の乱と宿阿内城

【15世紀】

関東では、古河公方足利成氏と関東管領山内上杉氏の対立により、享徳の乱と呼ばれる関東を二分する争いが繰り返されており、京の応仁の乱よりも10年以上早く、戦国の世となっていました。文明9(1477)年、管領上杉顕定の有力家臣長尾景春が反乱を起こし、顕定らがこもる五十子陣を崩壊させました。顕定一行は、利根川を越えて上野国阿内に逃れたといわれています。亀里町宿阿内に宿阿内城があり、顕定が退避した阿内はこの辺りと推定されています。



宿阿内城  
群馬県教育委員会『群馬県の中世城館跡』

## しやういだんばくれつこう 焼夷弾の傷跡

南部拠点地区遺跡群（新堀町、鶴光路町、亀里町）の調査では、平安時代の水田面に、周囲に高まりを持つ径1mの円形の穴が多数確認されました。穴の深さは2m以上、底からはパイプ状の金属片が確認され、ゴムが焼けたような異臭と湧水にオイルが浮く状況であったことから、第二次世界大戦中に投下された焼夷弾の爆裂坑であると考えられます。この焼夷弾は、昭和20年8月14日から15日未明に米軍第73・314爆撃隊によって実施された伊勢崎・玉村空襲の際に投下され、投下後、土壌を貫通し炸裂したことにより周囲の地山が圧力により持ち上げられたと推測されます。

【20世紀】



金属片出土状況



焼夷弾によってできた穴（別地点）  
（南部拠点地区遺跡群No.4）

享徳元年（1528）  
天文21年（1552）  
永禄5年（1562）  
永禄9年（1566）  
永禄10年（1567）  
天正6年（1578）  
天正10年（1582）  
天正18年（1590）  
慶長6年（1601）  
寛永14年（1637）  
寛保2年（1742）  
寛延2年（1749）  
明和4年（1767）  
天明3年（1783）  
文政4年（1821）  
安政6年（1859）  
文久3年（1863）  
慶応3年（1867）  
昭和43年（1968）

享徳元年（1528）  
天文21年（1552）  
永禄5年（1562）  
永禄9年（1566）  
永禄10年（1567）  
天正6年（1578）  
天正10年（1582）  
天正18年（1590）  
慶長6年（1601）  
寛永14年（1637）  
寛保2年（1742）  
寛延2年（1749）  
明和4年（1767）  
天明3年（1783）  
文政4年（1821）  
安政6年（1859）  
文久3年（1863）  
慶応3年（1867）  
昭和43年（1968）

北条氏康、武蔵御嶽城（みたけじょう）を攻め落とす。平井城に迫ると、関東管領上杉憲政（のりまさ）、平井城を出て上野国内を流浪する。  
北条氏康が武田信玄の上野侵攻に同調し、厩橋城を攻撃する。この年、越後北条高広、厩橋城に入る。  
武田信玄、箕輪城を攻略。  
上杉謙信、厩橋城を護り、北条・武田の大群（五万五千）を撃退する。  
上杉謙信が死去。その後、後継者争い「御館の乱」が起こり、後北条氏による上野支配が進む。  
滝川一益（かずます）が厩橋城に入城するが、本能寺の変で織田信長が倒れ、帰国する。越後北条高広が、後北条氏の沼田城攻略への参陣を拒否する。  
豊臣秀吉が全国を統一する。徳川家康が関東入りし、譜代の平岩親吉（ちかよし）を厩橋城に入封させる。  
平岩親吉が甲斐に移り、代わって川越から酒井重忠（しげただ）が厩橋城に入る。  
酒井忠清（ただきよ）が藩主となる。この頃「厩橋を前橋」と呼ぶようになる。  
利根川大洪水。  
藩主酒井忠恭（ただすみ）が姫路に転封となり、代わって姫路の松平朝矩（ともりのり）が入封する。  
前橋城下で大火。藩主松平朝矩が川越に移城する。前橋は川越藩の分領となる。  
浅間山大噴火、各地に甚大な被害を及ぼす。（浅間A軽石が降下）  
前橋藩善養生の農民、年貢軽減の訴訟を起こす。  
横浜開港に伴い、前橋の生糸が活況を呈する。  
前橋町人有志から一万両近い献金。前橋城再築が正式に許可される。  
前橋城が完成する。大政奉還。  
群馬大学などにより前橋天神山古墳の発掘調査が行われ、三角縁神獣鏡など前期古墳を代表する副葬品が出土する。